

鶴見文化財学会報

Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.18
2017年3月14日発行
鶴見大学文化財学会

受けつぐこと、受けついだ物

田中 和彦

2016年4月1日、同年3月末日をもってご退職された河野真知郎先生の後任として文化財学科に准教授として着任致しました。

ここでは、河野先生との出会い、その出会いを作っていた青柳洋治先生、両先生の師である八幡一郎先生の事について書きたいと思う。

河野先生と初めてお会いしたのは、1980年代中頃、フィリピン国立博物館の副館長A・エバンヘリスタ先生が来日した折、鎌倉の遺跡を青柳洋治先生とともに訪問した時であった。

その後、しばらく河野先生にお会いする機会は無かったが、私がフィリピン留学から帰国して一緒に仕事をする事となった。

上智大学の学芸員課程で、青柳先生が担当されていた屋内実習を非常勤講師として担当させて頂く事になったからである。

当時上智大学の学芸員課程は、青柳先生が中心となり、東京国立博物館を退職された山口正彦先生と鶴見大学の河野真知郎先生が非常勤講師として教鞭をとられていた。

その中で、河野先生は、非常に厳しい先生として学生たちから怖がられていた。実際一緒に仕事をさせて頂くと、厳しい中にも細やかなアドバイスを頂いたことが何度かあった。

また、河野先生が上智大学の学芸員課程で非常勤講師をされるようになった事については、八幡一郎先生の助言に従って、青柳先生が鎌倉考古学研究所にお願いにうかがった所、河野先生は二つ返事でOKしてくれたと青柳先生からうかがった。

鶴見大学の研究室への引っ越しも終わった5月5日、就職のご挨拶に横浜市中区の青柳先生のご自宅を訪問した。その日は、先生の75歳の

誕生日でもあった。先生から「本当によかった」と言われ、お祝いにと八幡一郎先生から譲られたという鎌倉彫の漆塗りの皿を頂いた。「八幡の爺い（青柳先生は親しみを込めて八幡先生の事を時々そう呼ばれる）も嬉んでいるだろう」と。先生が誰よりも敬愛されていた八幡先生から頂いた大切なものを私に託してくれたその気持ちが嬉しかった。一方、鶴見大学の専任教員となると同時に東南アジア考古学会の会長に就任したことについて、「謙虚でいろよ、稲穂のように」と悟された。良い事が重なって少し浮かれ気分になっていた自分自身が恥ずかしく思えた。

翌6月、青柳洋治先生は、横浜港が見えるミナト赤十字病院に入院され、大腸の腫瘍を切除された。この手術の直前、カトリックの信者である奥様のたつての希望で、先生は洗礼を受けられた。洗礼名は、先生の希望で、大好きなフィリピンのビールと同名のサン・ミゲルとなった。

術後の経過も良く、退院された先生はご自宅で療養され始めた。その先生から介護用品を自宅に入れるので、自宅の書籍を至急引き取ってほしいと頼まれた。頂いた本の中には、三上次男先生のサラワク調査に参加した折、サラワク博物館から頂いた紀要（Sarawak Museum Journal）があった。ご自身の研究室に持ち帰られた日、研究室でお会いした先生が、三上先生から「お前の所に（その紀要を）借りに行くから」と言われたと嬉しそうに語ってくれた事を今もよく憶えている。

八幡一郎先生は、今總持寺の墓地に眠っておられる。学校法人總持寺学園、鶴見大学専任教員の私を今後も見守り下さい。

文化財学会 春季大会・秋季シンポ関連報告

平成28年度春季大会
『倭鏡研究の現在』

報告 3年 岸 なつみ
2年 松田 悠

平成28年度春季講演会は、6月4日（土）「倭鏡研究の現在」と題して、川崎市市民ミュージアム学芸員新井悟先生にご講演いただいた。倭鏡とは中国鏡を模倣して古墳時代に作成された高錫合金製の鏡のことをいう。倭鏡が日本で認識され始めたのは、明治の半ばのことである。それまで倭鏡は中国鏡を模倣して作成されたという認識だったため、資料的価値が少ないとされていた。

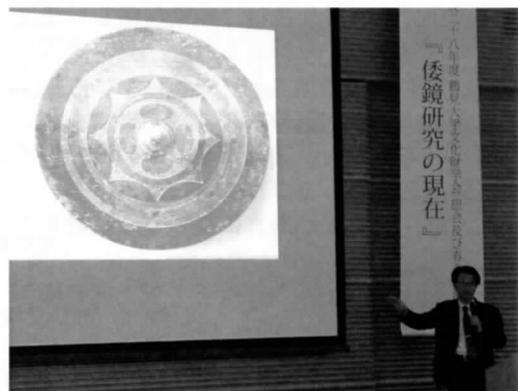
倭鏡はすべて円形であり、文様は中国鏡を模倣している。しかし変形して本来の形とは異なったものになった稚拙なものも多く、図形化してしまう例もある。しかし、家屋紋や直弧紋などのように、一部に独自の文様表現もみられる。また、初期の倭鏡は中国鏡に比べ大型であり、鏡の縁に鈴をつける等、日本独自の様式が見られる。さらに初期の倭鏡は中国鏡に見劣りしないほど高い技術で铸造されている。

倭鏡の研究は明治よりおこなわれている。考古学者である八木契三郎氏は中国鏡の影響下にはない、日本独自の文様で構成された「和鏡」が存在すると考えたが、和鏡が見つかることはなかった。富岡謙三氏『古鏡の研究』（1920年）の中では倭鏡の技術は高いものの、中国鏡の稚拙な模倣品でしかないと述べた。これに対し後藤守一氏は『漢式鏡』（1926年）の中で好意的な評価をしている。田中琢氏『古鏡』（1879年）は倭鏡は中国鏡の模倣から始まり、日本では呪具祭器としての特質が付与され、

政治と祭儀のなかで呪力を発揮するという独特の様相をもつ世界を作りあげたとしている。

これらの考えを変えるきっかけとなったのが、徐萃芳の『三国両晋南北朝の銅鏡』（1984年）である。中国鏡の日本への伝来は3世紀と考えられており、中国北部・南部それぞれから異なった様相のものが輸入された。しかし、4～5世紀には铸造は停滞し、6世紀には中国鏡は衰退している。三角縁神獸鏡は日本のみでしか見つかっていないことから中国から渡った職人が日本で作ったものではないかと考えられた。三角縁神獸鏡の製作地については型式学的方法と制作技術的方法、分布論的方法の3つのアプローチがあり、そこから、中国鏡と倭鏡は別々のものである、すべて日本製である、すべて中国製であるという3つの学説が示された。これに関して新井先生は三角縁神獸鏡はすべて中国製ではないかと考えている。このように倭鏡の研究は今日見直され始めている。

これまでの倭鏡研究は出土したものを編年表に沿ってまとめ上げていくことが主だった。しかしこれからは出土したことに重点を置いて考えるのではなく、遺跡に埋める以前や使用されていた際のこととも考え歴史に結び付けていくが必要になっていくだろう。



春季大会の様子

平成28年度秋季シンポジウム
『海外考古学の現場』

報告 2年 池谷 桃子
2年 松田 悠

平成28年度秋季シンポジウムは11月5日(土)『海外考古学の現場』と題し4人の講演者を迎え開催された。

- ・「中東と南洋；昔の調査から
—層序・遺構と調査団生活—」
本学名誉教授 河野真知郎先生
- ・「フィリピン、ルソン島北部、
ラロ貝塚群の発掘調査と土器編年」
本学文化財学科准教授 田中和彦先生
- ・「古代エジプトの木棺について」
本学大学院博士後期課程 米山由夏氏
- ・「パローチスターン地方の先史土器文化」
本学大学院博士前期課程 山田明子氏

河野先生はシリアや南洋での発掘調査について述べられた。シリアにあるテル(遺丘)では斜面を階段状に掘り下げ、どのような文化層の重なりになっているか調査した。調査では広範な遺跡平面図の作成や土層推種の順序ひいては各層の年代がわかる土層断面図作製が重要と指摘された。南洋のラッテ遺跡でも、地形と石柱の配置関係や埋葬人骨との同時関係の把握が必要とされた。最後に、調査で意外に大切なのは、調査団員の調査技術と長期にわたる「人の和」であると述べられた。

田中先生はフィリピン、ルソン島北部での貝塚群の調査や発掘現場でのエピソードについて述べられた。マガピット貝塚、バガッグI貝塚、カトゥガン貝塚の層位的発掘調査と層単位の遺跡間比較によりマガピット貝塚第V層上部出土土器とカトゥガン貝塚第V層出土土器、バガッグI貝塚第VI層出土土器とカトゥガン貝塚第IV層出土土器、バガッグI貝

塚第II層出土土器とカトゥガン貝塚第III層出土土器が同時期であると分かり後期新石器時代から金属器時代の土器編年を構築した。発掘現場に関するエピソードでは、治安が悪かった1980年代後半のマガピット貝塚調査の際、迷彩服を着た元フィリピン国軍の将校が現地の作業員を銃で脅しそれを止めに入った日本人の先輩の話を紹介し、現地調査の厳しさを知ったと語った。今後はスペイン植民地時代の土器編年の構築が課題であると述べられた。

米山氏は古代エジプトにおける木棺形態の変遷について述べられた。古代エジプトでは先王朝時代末に木棺が出現、箱型の棺が使われるようになった。その後、人型棺が中王国時代後期に出現し、第17王朝末期以降盛んに作られるようになった。木棺は長きに渡り形態を変化させてきたが、第18王朝以降のように北部地域まで広がったのかわかっていない。今後は科学的な分析から得られた情報と考古学の成果を組み合わせ、人型棺の発展について研究を行っていききたいと述べられた。

山田氏はアフガニスタン・パキスタン・イランにまたがるパローチスターン地方の先史土器文化について述べられた。乾燥した丘陵地帯であるにもかかわらず、この一帯には紀元前7000年頃から人々が定住し、多彩な土器文化が築かれてきた。土器製作の早期から回転台を使い、多様な器種と動物・植物・精緻な幾何学文などに特徴があり、不明とされていたインダス文明の起源の解明につながる可能性も示唆されている。現在は政情不安で発掘調査は行われていないが、日本に所蔵されている資料を研究し、南アジアの歴史の解明に近づきたいと述べられた。

討論では本学文化財学科教授・宗臺秀明先生を司会に迎え、海外での研究を行う場合考古学や文化財学の視点からみてどのような意味があり、どのような覚悟が必要であるのか各講演者から活発な意見が交わされた。

実習の感想

〈実習Ⅳ・国内コース〉

三重・和歌山の文化財巡検を終えて

緒方 啓介

今年度の実習Ⅳ国内旅行は「伊勢・紀伊の社寺と美術を訪ねて」をテーマに、9月1日から7日までの6泊7日で行った。参加学生は12名。引率教員は緒方と星野先生。

古代から日本の祖神として尊崇される伊勢神宮や紀伊半島南部の熊野三山と真言宗の聖地高野山を巡り神道文化や仏教美術を学ぶとともに、世界遺産として登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」の意義を考えることを目的とした。

7日間の行程は以下のとおりであった。

○9月1日(木) 曇り時々晴れ

午前新横浜駅に集合し、名古屋経由で近鉄特急に乗換えて伊勢市へ向かう。到着後、伊勢神宮の外宮豊受大神宮へ。森厳な気持ちで正殿を参拝し、1週間の実習旅行の安全を祈願した。外宮参拝後、内宮へ移動。宇治橋を渡り、五十鈴川で手を清めた後、正殿を参拝した。その後おかげ横丁を散策して、名物赤福に舌鼓を打った。伊勢市内泊。

○9月2日(金) 晴れ時々曇り

伊勢神宮の宝物館である神宮徴古館を見学。片山東熊設計の展示館前で集合写真を撮った後、古神宝類や式年遷宮資料等を展観した。その後野古道センターへ。展示とビデオで熊野古道の概観を知ることができた。新宮市内泊。

○9月3日(土) 曇り時々雨

午前中に熊野市速玉大社へ。参拝し宝物館を見学した後、熊野那智大社へ。小雨が降る中、参道の石段を登り本殿を参拝し、宝物館で女性学芸員さんの丁寧な解説を受け宝物館をでる頃には雨もやんでいた。隣接する青岸渡寺を参拝後、境内で那智の滝をバックに記念写真。飛瀧神社に移動し、遥拝所でご神体の那智の滝を間近で参拝してその迫力を感じることができた。昼食後、熊野本宮大社へ。杉木立

の参道を進み本殿を参拝した。本日の宿である川湯温泉では、露天風呂で旅の疲れを癒すことができた。

○9月4日(日) 曇り時々雨

午前中みなべ市の南方熊楠顕彰館で熊楠収集の博物資料や生家を見学した後、熊野水軍の遺跡三段壁を見学した。昼食後、アドベンチャーワールドを見学し、博物館施設としての飼育や展示を学び、双子のパンダに心癒された。南部泊。

○9月5日(月) 曇りのち雨

午前中に安珍・清姫伝説で有名な道成寺で国宝仏を拝観した後、僧侶による縁起絵巻の絵解きを拝聴した。湯浅勝楽寺では収蔵庫内に安置される重文の丈六仏を特別拝観させて頂いた。有田の浄妙寺では連絡不足のため本堂内の拝観がかなわなかったのは残念であった。雨降る中、徒歩で星尾明恵上人紀州遺跡を訪ねた。宿である龍神温泉では、打ち上げの宴会に興じた。

○9月6日(火) 曇りのち雨

深夜のすさまじい雷も収まり、高野山へ向う。奥の院では空海の御廟を拝観した後、約2万基に及ぶ諸大名や高僧などの墓石・供養塔を見学しながら2キロの参道を散策した。昼食後、金剛峯寺や壇上伽藍を拝観した。霊宝館では山内の文化財の数々を堪能した。宿坊天徳院泊。

○9月7日(水) 晴れ時々曇り

全員で朝のお勤めに参加した。最終日にふさわしい晴天の中、丹生都比売神社を参拝し、阪和道を経由して新大阪駅へ向かい新幹線で帰路についた。

天候不順の中、長距離の移動を含む1週間の行程であったが大きく体調を崩す参加者もなく、大変充実した巡検旅行となった。

〈実習Ⅳ・国外コース〉

巡検報告 台湾周遊

—歴史、風土、博物館—
小池 富雄

教員の参加は石田千尋教授と小池の2名。学生は21名が参加した。9月5日から9月11日まで、台湾南部の高雄、台南から首都の台北まで史跡・新旧の博物館・美術館などを7日間かけて回った。電気製品製造の創業者が世界の美術品を集めた奇美美術館、故宮博物院の分館の南院などは世界水準の最新設計、コンセプトの施設である。戦前の旧日本時代の建築がきれいに保存修復、活用されているのを見学の主眼とした。

酷暑では無かったものの、連日の大雨に遭遇し、最終日を除き雨傘が必須であった。時に歩道も小川のように雨水があふれ靴は水没。地元住人に習って多くがビーチサンダルの類を購入し、履き替えるようにした。

第二次世界大戦後、蒋介石が中華民国を台湾に建国するまで台湾は長きにわたり日本の一部であった。85歳以上の老人で日本語を話す人が多数あり、日本統治時代の建築や社会資本が大切に残されている。日本内地ならば、戦災で失われ、あるいは解体されたのであろう建築も多数残されている。今回の巡検は、台湾南部の高雄に空路で入り、チャーターバスで3都市を北上しながら回った。中南部には、日本統治時代の建築が文化財として博物館に

転用保存活用されている。台湾は、現在でも世界中で最も親日的な国の1つである。殊に中南部は、過去も現在も親日である。

今年1月の総統選挙・国会議員選挙では、親北京の国民党が大敗し、台湾の独自路線を主張する民進党の女性党首・蔡英文が政権を握った。

大航海時代にはスペイン、ポルトガル、オランダがこの島に拠点を築き、清に抵抗した鄭成功の時代、清の支配を経て、日本が統治した。毛沢東との闘争に敗れた蒋介石の国民党支配は今年で終焉し、今後は台湾独自の歩みをするのであろうか。参加者からの質問に、世界遺産は台湾にいくつあるか?の問いに相当数は存在するも実際にはゼロ。ユネスコに加盟していないからであると答えた。複雑な歴史、政治が現在も台湾を取り巻いている。

旅程は下記のとおり。

- 9月5日（月）成田空港→高雄空港 六合夜市。高雄泊。
- 9月6日（火）三鳳宮（道教寺院）高雄市歴史博物館（旧市庁舎）、孔子廟、赤嵌楼、安平古堡（ゼーランディア城）、林百貨店、台南泊
- 9月7日（水）奇美美術館、台南泊
- 9月8日（木）嘉義市・国立故宮博物院南院、嘉義神社跡、台北泊
- 9月9日（金）台北・国立故宮博物院
- 9月10日（土）九份・黄金博物館、坑道内体験。
- 9月11日（日）国立台湾博物院、台北→成田



神宮徴古館にて（国内コース）



台北・国立故宮博物院にて（国外コース）

研究部会報告

江戸東京研究部会

江戸東京研究部会は「歩くと歴史が見えてくる」を目標に毎週月曜日18時から1号館405教室や図書館2階で事前学習・研究活動などを行い、週末には江戸東京に関する史跡や博物館、史料館などへの巡検を行っています。

今年度前期は江戸城に関する研究を行い、夏休みを利用して江戸東京博物館への巡検を行いました。ここでは江戸城御殿や大名古屋、日本橋周辺などの模型などを用いて町割りの様子などについて学びました。

後期は江戸初期から幕末にかけての江戸城の変遷について天守台や石垣から研究を行いました。

天守は明暦3(1657)年の火災で焼失し、翌年に加賀藩前田家の普請により高さ18mの花崗岩でできた天守台が築かれました。しかし、保科正之の城下の復興を優先すべきであるとの提言により、天守の再建は行われず、石積みだけの天守台が残りました。古い石垣は野面積みと呼ばれ、天然の石を加工せずに積んだ形式で石の間に隙間が多く、これを改良したのが石の角を削って隙間を少なくした「打込ハギ」、ここからさらに石を四角に加工してぴったり隙間なく積み上げた「切込ハギ」という工法へ技術が進化したことがわかりました。

今後の活動方針としては、今まで行ってきた巡検に加え、より部会員の興味・関心のある分野の研究や調査を重視した活動をしていきたいと思っています。さらに、今後たくさんの方々へ本研究部会の活動を知って頂けるように活発に活動していきたいと思っています。

古典芸能研究部会

私たち古典芸能研究部会は普段あまり触れる機会が少ない日本の古典芸能を中心に直に触れて雅楽や装束体験を行い、能や狂言を実際に鑑賞します。授業では学ぶことのできないものを座

って学ぶだけでなく、実際に体験して伝統文化を学ぶことを目的とした研究部会です。またその分野について深く知るために博物館などに巡検を行うこともあります。

今年度の古典芸能の活動は、今年2月に東京成徳大学の青柳隆志先生を教師としてお越し頂き、昨年度に引き続き和楽器の笙を行いました。

笙は奈良時代ごろに雅楽とともに伝わってきたものだと考えられています。音を出しやすい楽器ではありますが、笙は押さえる穴が多く、また息を吹き込むと水気が溜まりやすい楽器で演奏しない間は行火(あんか)などで暖める楽器です。当日は基本的な指使いを覚えていき、最後にはこの体験を行った全員で「越天楽」を演奏しました。実際に体験してみると、指使いや楽譜の読み方に戸惑うことも多かったですが、普段あまり触れることのない楽器である笙を体験することができた事は、とても貴重な体験で楽しかったです。また最後の「越天楽」の合わせでは初めてで所々に音の外れる場面はありましたが、笙一つひとつの音が合わさりとても綺麗でした。今回の活動を通してより雅楽の良さと楽しさを感じることができ、とても良い経験ができたと思います。

今年度は夏の活動ができなかったのも、冬の活動として大まかには決めていませんが、体験講座または博物館の巡検を行えたらと考えています。

歴史考古学研究部会

歴史考古学研究部会は考古学・文献史学を中心とした研究を行う研究部会です。毎週金曜日午後6時から、6号館地下1階の考古学実習室で活動しています。実習の授業で習ったナンバリング・実測・拓本・トレースなどを行い、積極的に研究に生かしています。また、平成25年度から由比ヶ浜や鎌倉市街地、江ノ島片瀬海岸などで、古代・中世期の土器・陶磁器片を採集できるという事実から着想を得、巡検で土器・陶磁器片を採集し、ナンバリングを施し整理した後実測や拓本の作成・調査研究をする活動を行っています。

平成28年度は新しく採集した土器・陶磁器片

の調査研究を行い、その調査成果を鶴見大学が行う文化祭「紫雲祭」にて展示する活動を行いました。昨年度行えなかった遺構の再現にも力を入れました。引き続き鎌倉・由比ヶ浜での採集巡検を行いつつ採集した資料の調査研究を行っていきます。

また今年度初の試みとして、夏に新潟での発掘調査に参加しました。実際の発掘現場で作業に従事できる機会は少なく、参加した部会員にとって良い経験になりました。今後も発掘調査には積極的に参加していく予定です。さらに、各地で行われている発掘調査成果報告会への参加や、遠隔地への巡検も予定しております。

考古学や文献史学に興味がある方、考古学資料の実物に触れてみたい方、実測などの考古学的手法による調査研究に興味のある方は、ぜひ一度見学にいらしてください。

美術工芸研究部会

美術工芸研究部会は、絵画・漆芸品などの美術品や工芸品を展示している博物館・美術館の巡検を行い、学ぶことを主な目的として活動しています。

今年度は8月2日に東京藝術大学大学美術館で行われた「観音の里の祈りとくらし展Ⅱ一びわ湖・長浜のホトケたち」を見学しに行きました。

今回の展示では、滋賀県長浜市に伝わる「ホトケ」たちの優れた造形とともに、精神文化や生活文化を「祈りの文化」として紹介し、長い歴史の中で守り継がれた地域に息づく信仰を全国に発信することがテーマとなっていました。

長浜市には、130軀を超える観音像をはじめ、たくさんの仏像が伝わっており、古くは奈良・平安時代に遡るものもあります。これらの仏像は大きな寺社で守られてきたものではなく、地域の暮らしに根付き、そこに住む人々の信仰や生活、地域の風土などと深く結び付きながら、今なお大切に守り継がれてきたものです。

本展示では、馬頭観音像が展示されていたこともあり、馬頭観音像がどのような姿や表情をしているのかなどに注目して見学できる良い機会に

なりました。とくに印象に残ったのは千手千足観音立像でした。この像は、一般的な千手観音像とは異なり、足も1000本という姿をイメージして作られており、非常に驚きました。

昨年度は積極的に活動ができていましたが、今年度は活動が1回しか行えなかったので来年度は定期的に活動を行いたいと思います。

うるし研究部会

うるし研究部会は今年で創設4年目を迎えます。漆を使った作品制作や漆または漆器生産地見学などの実践的な体験を通し、漆について深く学ぶことを目的に活動しています。

毎週水曜日(14:00～)の活動日では、毎年3月に主催する制作展に向けて、部会員それぞれが漆塗りのお盆、カードケース、箸などを制作しています。

平成28年度の産地見学では、8月5、6日に1泊2日の旅程で国内有数の漆器生産地である石川県輪島市を訪問しました。工房を見学し、職人の方々から貴重なお話を伺いました。輪島漆芸技術研修所や輪島漆芸美術館などを訪れ、輪島塗や漆への理解をより一層深める素晴らしい機会となりました。

また、石川県輪島市との連携事業により、10月29日から11月3日の5日間にかけて、輪島塗に関する展示会を鶴見大学会館にて開催しました。そして、11月3日に同場所にておこなわれました「講演会：能登の漆文化と輪島塗」の運営に携わりました。

さらに鶴見大学図書館所蔵「黒漆枝垂桜燕蒔絵源氏筆筥」のクリーニング作業をおこないました。外部から講師の先生をお招きし、文化財修復についての講義を受けました。漆芸品修復について、深く学ぶことが出来ました。

今年度も新たな仲間を迎え、沢山の経験を積み、充実した1年となりました。来年度の活動は今年度以上に漆や漆器の魅力を学び、発信していけるように部会員が一丸となって活動していきたいと思っています。

鶴見大学文化財学会会則

1. 本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2. 本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3. 本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦をはかることを目的とする。
4. 本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
 - 1 研究等の発表
 - 2 講演会の開催
 - 3 会誌・会報等の編集刊行
 - 4 研究部会活動
 - 5 HP上での広報活動
 - 6 親睦その他の事業
6. 本会に次の役員を置く
 - 1 会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
 - 2 委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営に携わり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
7. 本会の経費は会費（年額千五百円）、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。
8. 本会の事務所は下記におく。

〒230-8501
神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地5号
鶴見大学6号館文化財学科合同研究室

付 平成11年10月16日から発足する。

付2 平成16年4月1日 一部改正

付3 平成23年4月1日 一部改正

付4 平成28年4月1日 一部改正

平成29年度の年間行事予定

- 春季講演会
日 時：6月3日（土）午後3時から
会 場：鶴見大学会館地下1階メインホール
テーマ：「川崎市橘郡街跡（仮）」
講 師：小柳津 貴子氏
（川崎市教育委員会）（仮）
- 秋季シンポジウム
日 時：11月4日（土）午後1時から
会 場：鶴見大学会館地下1階メインホール
テーマ：「色部文書と郡絵図の世界（仮）」
講 師：伊藤 正義先生
（本学文化財学科教授）他
- お問い合わせ
045(580)8139 文化財学科 合同研究室

編集後記

無事、文化財学会報第18号を刊行することができました。ご助力頂きました多くの方々に、この場をお借りして篤く御礼申し上げます。この会報を通して、皆様に少しでも本学会を知っていただければ幸いです。今後も委員一同力を合わせ、学会をより良いものにしていきたいと思っております。（会報一同）

連絡先

〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地3号
鶴見大学 文化財学会
TEL:045(580)8139
URL:<http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/bunkazaigakkai/index.html>
E-mail:bunkazai@tsurumi-u.ac.jp